

Mosquitoes: Patricia と Grapefruits

太田直子

I

William Faulkner の第 2 作目の小説 *Mosquitoes* は、高く評価された作品とはいえない。逆に、“Faulkner’s least respected novel.” “There is almost no story line.”¹⁾ “Faulkner’s second novel, published in 1927 must be consigned to the overcrowded literary limbo of interesting failures. It has many weakness.”²⁾ などと、厳しく批判されている。彼が New Orleans に滞在中に親しく交わった芸術家仲間を作品で擬人化したものとして、“a satirical novel”³⁾ ともいわれるが、全般的に辛口の批評を受け、取り上げられることも少ない。1926年2月25日、*Soldier’s Pay* を New Orleans で書き上げ、1926年の春、Oxford に戻った Faulkner は、親友 Phil Stone の兄 Jack とその妻 Myrtle に招待され、Mississippi 州 Pascagoula の彼等の別荘で夏を過ごす。*Elmer* を書くのをやめ、*Mosquito* (のち *Mosquitoes* となる) を執筆し始める。書き上げた *Mosquitoes* を Helen Baird に委ねたが、送られてきたゲラ刷りを見た Faulkner は、Horace への手紙の中でこう述べている。

I’m sorry my letter about ‘Mosquitoes’ sounded querulous: I was not trying to complain at all. I understood why the deletions were made, and I was merely pointing out one result of it that, after all, is not very important. Regarding the punctuation: that was due to my typewriter, a Corona, vintage of 1910. I have a better one, now.⁴⁾

Mosquitoes は、Maurier 夫人の好む芸術家達と、その姪の招待で集まった人々が、狭い Naucikaa 号の中で繰り広げる話である。そのヨットパーティーに参加した人々は、3つのグループに分けることができる。1) Ernest Talliaferro, Major Ayers, Mark Frost, Dawson Fairchild, Julius Kauffman ら、いわゆる “the older men”、2) このヨットパーティーのホステスの Patricia Maurier, Eva Wiseman, Dorthy Jameson という “the older women”、そして 3) Patricia Robyn, Theodore Robyn, Pete Ginotta, そして Genevieve Steinbauer, 通称 Jenny ら、“the younger people” のグループである。そして、この3つのグループの人々の “talk” を中心に物語が展開していく。

“... the people on Mrs. Maurier's yacht talk in a great deal of territory; but their talk, whether bantering or serious, circles around two principal topics: art and love, or more specifically, literature and sex.”⁵⁾

と Brooks が述べているように、その人々のそれぞれの特質の持ち味により、様々な話題が持ち上るが、それが Faulkner 自身の芸術論、恋愛論を示すものともいわれている。そのヨットの上での “talk” は、大部分が “the older men” “the older women” の物であり、彼等は、“talk”、飲食、ダンス、ブリッジで時を過ごし、目立った行動を起こそうとはしない。それとは対称的に、“the younger people” は、“individually more independent and self-assured”⁶⁾といわれるように、各々が特色を持って個人的な行動を起こしている。“the younger people”の中で、“The roles of the youngmen in the novel are unimportant”⁷⁾といわれる Pete, Josh の2人の男性も含めて、いわゆる “the casualness of the young”⁸⁾が、“the older people”の “talk”の間に、様々な動きをもたらし、物語を展開させ、変化を与えていると考えられる。

この “the younger people”の中でも、人を魅了する姿を持ち、その言動が際立つ Patricia は注目に値するが、彼女と同様、作品を読み進むにあたって注目されるのが、“グレープフルーツ”である。アメリカ人好みで、馴染みの深い果物グレープフルーツは、ヨットが坐礁している4日間、毎日食卓に出される。このグレープフルーツが、そのヨットの上での人物の心理状態によって、様々な観点から合計7回にわたって描写されていることに注目し、小論では、先に述べた Patriciaとこのグレープフルーツ、人物と果物という異なったジャンルの2点に焦点を当てて、これらを通して *Mosquitoes* を考察していきたい。

II

Joseph Blotner は、Faulkner の描く女性を5つのタイプに分類している。⁹⁾

1. the admirable little girl
2. the voluptuous young woman
3. the slim and virginal young woman
4. the mature temptress
5. the matron

第3の “the slim and virginal young woman” の代表が、*Mosquitoes* の中の Patricia Robyn である。ヨットのホステス Maurier 夫人の姪である Patricia は、“Prologue 2” から登場し、子供のような容姿に、その好奇心と無知さもさらけ出す。

“the clean young odour of her, like that of young trees; ... her slim shape and the impersonal revelation of her legs and her bare sexless knees.”¹⁰⁾

Her jaw in profile was heavy: that was something masculine about it. But in full face it was not heavy, only quiet. Her mouth was full and colourless, unpainted, and her eyes were opaque as smoke. (p. 14.)

... her flat breast and belly, her boy's body which the poise of it and thinness of her arms belied. (p. 15.)

扁平な胸部、腹部、そして細い腕と少年のように見える体つきは、女性の魅力の欠如、いわゆる豊満な女性の肉体を引き立たせる役目を担って登場するものであり、主要な人物として注目されることも少ない。Faulkner は、Eula Varner, Lena Grove の様な肉体美を全身に発散させ、男性を魅了していく女性を *Mosquitoes* の中では登場させず、“impersonal” “masculine” そして Fairchild の言う “strange sexless shapes” (p. 208.) な中性的女性美を、“Sexless, yet somehow vaguely troubling.” (p. 15.) と男性にいわせる程の崇拜美にまで描き上げていると言えよう。これは肉体的女性美を誇る女性に対して、それと相反する対象物として、いわゆる The Faerie Queene に対する Dark Lady のごとく扱っていることになる。

始めに Patricia の魅力に気が付くのは、Maurier 夫人のヨットパーティーに参加したいいわゆる“芸術家”の中でも“真の芸術家”とされる Gordon である。Gordon が、この Patricia に会った直後から魅了されていることは、興味深いことである。Talliaferro の案内で、Maurier 夫人と共に Gordon の部屋を訪れた時の Patricia の子供のような言動、そしてその彼女に魅了される Gordon。この 2 人には、2 つの大きな共通点があることが分かる。

その 1 つは美意識である。

'This is my feminine ideal: a virgin with no legs to leave me, no arms to hold me, no head to talk to me;' (p. 16.)

Gordon の創造した大理石像は、彼の理想の女性像を偶像化したものである。その大理石像にただ賛美の言葉を浴びせ掛ける Maurier 夫人と、“It's like me,” (p. 14.) と呟き、石像を感触で確かめる Patricia。彼女はつまり、Gordon の美の理想を集積した大理石像に自分の姿を認め、ナルシズム的自己満足をえる。のちに、ヨットパーティーの終りになり、Gordon が直に Patricia の顔に手で触れ、その姿を手で確認している際、Patricia は自分の姿も大理石像と同じく偶像化できるかと尋ねる。Gordon がそれが可能である事を告げると、Patricia は、自分の石像ではなく、Gordon が以前に創作したあの大理石像を貰おうとする。自分の姿が大理石像と同じ様な物であると断言しながらも、実は Gordon の大理石像の方の美をさらにもっと意識していること、すなわち彼女の“美”へのある種の心象を見ることが出来る。自らが望むものだけを追及する Gordon が、Patricia の姿を次に偶像として創作できると語ることで、作品の中で確かに Patricia の姿が、Dark Lady のごとく新しい“美”として誇示されていることが

立証される。

他の1つは、2人が自己中心的な人物として描かれていることである。大理石像を見て、“I wish I could have it.” (p. 15.) と4歳の子供のように言う Patricia と、自分の世界の中だけで生活し、ヨットパーティーでも他の人との会話にも参加しない気ままな Gordon。さらに、この2人は別々ではあるが、密かに Nausikaa 号を抜け出し、また別々に2人とも同じ foul-mouthed swamper に連れられてヨットに戻ってきた。Gordon はその謎めいた言動から、神秘的なベールに包まれているように見えるが、Gordon の失踪は詳しく描写されていないだけであり、結果的には Patricia の逃亡と何の変わりもなく、愚かにも、また退屈な Nausikaa 号に戻って来るしかなかったのである。

III

Gordon の失踪とは対称的に、Patricia と David West の逃避行は、かなりのスペースをとって詳しく描かれている。Fairchild に世話をされ、Nausikaa 号に料理人として乗り組んでいた David West は、Patricia にヨーロッパでの自由な旅、スイスの湖と山の話などを得意げに話し、その話にすっかり魅了された Patricia は、強引にも、ヨーロッパと一緒に行く約束を取り付ける。

‘Well, you fix it up to go, then. I’ll give you my address, and you can write me when to start and where to meet you...’ ... ‘I wish we could go to-morrow, don’t you. Next Summer...’ (p. 105.)

さらに、一緒に泳ごうと誘い、月夜に2人で泳ぎ回るうち、David は “there was a wind coming through the trees and he stopped and heard music somewhere.” (p. 138.) という心地になり、ついに船べりを掴んだまま “...looked up at her with an utter longing, like that of a dog.”

(p. 138.) と完全に Patricia を仰ぎ見る状態に陥ってしまった。それから David は、Patricia との逃避行の間、常に泥まみれになりながら、蚊に食われ、我が儘放題に叫ぶ Patricia を助け、散々なおもいをしながら “his beastlike longing” (p. 186.) を抱き続けるのである。Gordon のように自分の美意識に適合しそうな女性に魅了されていく者と、David の様に Patricia の我が儘に引きづられながら、彼女の姿に魅了されていく者が存在する。このように、Gordon や David のように、自己中心的で気まぐれな Patricia の態度を嫌と言うほど実感させられながらも、その彼女に魅了されていく男性が描かれる一方、Patricia をまったく違う観点で見抜いている人物も描かれている。それが Patricia の双子の兄、Theodore Robyn、通称 Josh である。

Josh は、フラクサーニティーに入るためだけにエール大学に入学しようとする、変わった青年である。彼はヨットパーティーに大工用鋸を持って参加し、パイプを作ることに専念し、他の人とは交わらず、船室に籠り、このヨットパーティーに何の影響力をも持たないようである。

しかし、彼のパイプ作りのために必要な “a small straight steel rod.” (p. 73.) を船のエンジンから抜き取り、それが原因で Nausikaa 号が坐礁してしまうのである。こうした無邪気で身勝手な Josh の行動が、“坐礁した船” というこの小説の状況、場面を設定してしまうことは興味深い。船が坐礁し、人々がそのなかで暇をもてあましている中、妹が David と逃亡し、Gordon が失踪した事件につながったことに対しても、拘りも示さず、なんら罪の意識も見せない。妹 Patricia が側に寄ってくると、神経質にも彼女を自分から遠ざけようとする Josh の態度が注目される。

‘What are you doing down here ? Who told you to come down here ?’ (p. 61.)

‘Look here,’ he said hiercely, his voice shaking, when they were again in the passage. ‘What are you doing, following me around ? What did I tell you I was going to do if you followed me any more ?’

‘I wasn’t following you. I—’

‘Yes, you were,’ he interrupted, . . . (p. 62.)

Faulkner の作品の中で兄と妹に関して描かれているのは、*The Sound and the Fury* の Quentin と Caddy がその代表的なものである。「梨の木に泥で汚れたお尻を見せて登っている少女」Caddy は、利発で活動的な少女だが、女性として目覚め、ドールトン・ユームズとの恋愛から身を持ち崩れてく。この妹 Caddy の姿に Quentin は大きな衝撃を受け、彼女を独占するために自己葛藤を繰り返し、彼女に近親相姦の衝動を感じるようになる。知的で Compson 家の期待を一身に受けてハーバードに旅立った Quentin は、妹 Caddy への特異な情愛関係、そして様々な家庭の事情によって、identity の喪失に苦しみ、自己愛への最終手段として死を迎える。この Quentin の Caddy への異常なまでの執着は、ある種のナルシズムであり、自己愛の象徴であるといわれるが、兄 Quentin の目を通し妹 Caddy を見ていくと、測り知れない関係を読み取ることができる。

Josh と Patricia は、さらに双子というまさしく神秘的な要素をもっているわけだが、Josh はひたすら妹を排斥し追い払い、彼女から解放されることのみを願っている。

‘Look here,’ her brother said, ‘are you going to follow me around all your life ?’ ‘I’m going to Yale,’ she repeated stubbornly. . . .

‘Well, you can’t go,’ her brother answered violently, ‘Dam’f I’m going to have you tagging around behind me forever. I can’t move, for you. You ought to be a bill collector. . . . (p. 223.)

Josh について自分もエール大学に行くとは断固主張する Patricia を、阻止することはできないと知りながら、憤然として “I can't do anything, for her,” “I wouldn't want her around me all the time.” (p. 224.) と拒否しつづける Josh。こうした妹に対する Josh の態度は、Quentin のそれとはまったく異なるように見えるが、この2人の兄は、積極的あるいは消極的に、自分に対する妹の存在感の重さを実感し、妹からの解放が、自らの存在感と自己愛の確立を意味することを痛感していることには変わりがないのである。

一方、兄を追いかけまわす妹 Patricia の行動は、まさしく Caddy の自由奔放な姿を見るようであるが、この2人は、決して同じカテゴリーに入る女性ではない。Caddy は “女性” として自分の欲する人生に向かって走り墮落していくが、Patricia はその気まぐれから、David West と逃亡するが、結局は戻らざるをえなくなり、一転して、兄の行き先についていくことを主張する。こうした Patricia の姿を、“The niece's incestuous interest in her brother is amusingly overt.”¹¹⁾ と、Albert J. Guerard は述べ、またそれは彼女の misogyny をも暗示しているという。

... the niece, clad in a suit of her brother's underwear—a knitted sleeveless jersy and short narrow trunks—surged out of the water... (p. 65.)

兄の下着の上下をわざわざ着て泳ぐ Patricia の姿には、“incestuous interest” を予見させるが、はたしてそうと断言できるであろうか。

They were twins: just as there was something masculine about her jaw, so was there something feminine about his. (p.34.)

この2人の描写は、Quentin と Caddy には見られない双子の兄妹の神秘的ともいうべき、2人にとって決して逃れられない宿命的な結び付きがあることを示す。Patricia という女性を見る場合、磁石に吸い付けられるかのようにその背後にくっつく Josh の存在があるが、その Josh も、かなり強い彼の特性を持っており、決して Patricia に収斂されるものではない。一方、Patricia は、Gordon、David という彼女に魅了される人物がいる一方、双子の兄 Josh という不可分な宿命的存在により、一人の女性としてこれから大きな力をもつ母、妻、そして女性という内なる力を身に付け、輝くばかりにそれを発散させていくという望みは薄れていくように思われる。

IV

次に、この作品の中でグレープフルーツが Patricia と重複し、同一化された存在物のように繰返して描写される。そのグレープフルーツが Patricia の一種の surrogate であるかのように

思われる一方、グレープフルーツは、その色と香をもつオレンジのアレゴリーであるという観点から、グレープフルーツについて考察してみたい。

William Saroyan の短編にもグレープフルーツと同じ柑橘類のオレンジが、作品の中で重要な位置をしめている。彼の短編、“The Oranges” は貧しい移民の一家が、飢えながらも笑顔をつくり、道端で明日の食糧のためのオレンジを売る話である。この一家の悲惨な生活と、オレンジの見るからにおいしそうな、その色と匂いの発散というこのコントラストが、この一家の惨めさを強調している。さらに、どんな状況にあらうとも変わることなく、それ自身の魅力をアピールしているオレンジは、移民にとっての憧れとでもいうべきアメリカそのものの姿であり、それでいて、身近で手にいれることはできるが、それは生活の糧の一つであって、それだけで人生を楽しめるものではないのである。

Mosquitoes の中でグレープフルーツは、ヨットパーティーの食卓用に、Nausikaa 号に積まれ、毎日のようにテーブルに並ぶ食物である。食事の場面で 6 回、その他で 1 回描かれているが、おもしろいことに Patricia がこれを食べた描写はどこにも見られず、これまで考察してきた Patricia とは全く関わりもない物のように思える。

食事時の 6 回の描写は以下のようなようである。

第 1 日 午後 1 時

He (Josh) had already seated himself and he now spooned into a grapefruit with preoccupied celerity. (p. 47.)

'Ah, grapefruit.' He (Fairchild) raised his voice again: 'How jolly: seen no grapefruit since we left New Orleans, ... (p. 48.)

昼食として始めてテーブルにグレープフルーツが並び、まず Josh がそれを脇目もふらず食べ、Fairchild はお世辞とも皮肉ともつかぬ言葉を吐きながらも、柑橘類の独特の匂いとその黄色の鮮やかであるが毒々しくない色、中性的な Patricia の美を代償するかのような、そのグレープフルーツに食欲をそそられて食べている。

第 2 の描写は、同じ 1 日目の夕食、午後 7 時。ここではなぜグレープフルーツが続けてテーブルの上に並んだか、Maurier 夫人が理屈っぽく説明する。

Years ago Mrs Maurier had learned that unadulterated fruit juice was salutary, nay, necessary to a nautical life. (p. 67.)

Hence there was grapefruit again for dinner: she was going to inoculate them first (p. 68.)

'Why, it's grapefruit: I can tell every time,' He (Fairchild) looked at Major Ayers. 'I'm not going to eat mine, now. I'm going to put it away and save it.' ... 'Save 'em by all

means.' (p. 68)

彼女は、グレイプフルーツをヨットでの“inoculate”と考えてみる。だが、この彼女の試みは早くも失敗し、Fairchildにあっさりとは無視されてしまう。さらに Major Ayers も Fairchild に同調し、“He set his grapefruit carefully to one side.”と“注意深く”それを横に置き、Maurier 夫人の意図を見抜くかのようにグレイプフルーツを意識的に取扱っている。

2日目に入って、さっそく午前8時、またもつづけて朝食にグレイプフルーツが登場する。この時点でヨットが坐礁したことが解り、進むことも引き返す事もできない Nausikaa 号で、時間が経過することになる。この状況の中、女性達、“the older women”は、かなり楽観的である。Wiseman 夫人は食事の始めにまずグレイプフルーツに手をつける。一方、男性達“the older men”は姿もみせず、彼等のグレイプフルーツは Maurier 夫人の指示でそのままテーブルに残される。しかし“... before each vacant place its grapefruit, innocent and profound.”

(p. 91) と、グレイプフルーツは、ヨットのその時の状態にも、テーブルにさえも姿を見せない年輩の男性達の気持ちとも全く関係なく、その姿をテーブルの上でさらけだしている。それと同じ頃、Patricia の身勝手な行動がますます表面化し、彼女はヨットパーティーの客ではなく、乗務員にその無邪気な姿をアピールしている。

4回目の描写は、3日目の午後1時、2回目と3回目の時間の間隔に比べて少し間があいているが、3日間食べ続けて食卓に並べられた。Patricia がコックの David と逃亡中であるため、当然料理人がおらず、落胆している Maurier 夫人にかわり、Wiseman 夫人と Jameson 夫人が昼食の用意をする。手の加えられていないグレイプフルーツが出された事に、Maurier 夫人が“‘We have so many of them,’... ‘And the steward gone... We are around, too, you see,’” (p. 155.) と弁解すると、“‘Oh, we can stand a little hardship,’... ‘The race hasn’t degenerated that far. In a book, now it would be kind of terrible; if you force characters in a book to eat as much grapefruit as we do, both the art boys and the humanitarians would stand on their hind legs and howl. But in real life—In life, anything might happen; in actual life people will do anything. It’s only in books that people must function according to arbitrary rules of conduct and probability; it’s only in books that events must never flout credulity.’” (pp. 155–56) と皮肉っぽく語る。グレイプフルーツを食べるか食べないかが、こんな議論にまで発展し、グレイプフルーツは Maurier 夫人への批判の手段として使われ、さらに思わぬ人生論、小説論、音楽論へと進んでしまうが、これに乗じて Wiseman の弟 Julius Kauffman もこう論ずる。

‘A character in a book must be consistent in all things, while man is consistent in one thing only: he is consistently vain.’ (p. 156.)

彼は人間の虚栄心の共存をもっともらしく語るが、まさしく虚栄心の固まりであるかのようなこの人々によって、おそらく前日とかわらぬ無邪気さと新鮮さ、そして加えて香りをも放つて

あろうグレープフルーツは、完全に拒否されてしまうのである。それと同じく、逃避した Patricia の姿も、この時人々の前から完全に消えてしまう。

ヨットでグレープフルーツが拒否されている丁度同じ頃、さまよい歩いている Patricia は、ヨットを出てくる際に持って来た“オレンジ”を食べる。彼女はヨットを出てくる時、“And—where are oranges? Let's take some oranges. I love oranges, don't you?” (p. 142) と、オレンジを持参することを強くもめている。なぜオレンジなのか。彼女がこの小説の中で“好む”のは、Gordon の大理石像とオレンジだけなのである。あのいわゆる彼女の大理石像への一体化と同様に、困難な逃亡の中でそれを食べることで、オレンジへの同一化がおこなわれると考えられる。年輩の男性達と違って、彼女は利己主義的な思想の中で、どの状況下でも“オレンジ”を受け入れる事ができる。つまり、自己愛を貫いていると言えよう。

そして、第 5 回目の描写。4 日目の朝、午前 8 時、“there was still plenty of grapefruits” Gordon が失踪している中、Patricia はなんとかヨットにもどり、再び失敗にひるむことなく大胆に登場している。

第 6 回目、食事時での最後の描写、4 日目、午後 7 時。

... but before four vacant places that bland eternal grapefruit, sinister and bland as taxes.” (p. 239.)

Fairchild 達が食事に姿を現し、グレープフルーツを見るや否や、“My God.” と落胆の表情を見せ、これが最後とばかりに論じる。

'the human body can stand lots of things. But if I have to eat another grapefruit... Say, Julius, I was examining my back today, and do you know, my skin is getting dry and rough, with a kind of yellowish cast. If it keeps on, first thing I know I won't any more dare undress in public than Al Jack—' (p. 241.)

徹底的にグレープフルーツをけなし拒否することは、ヨットパーティーと、そのホステスを強く批判することでもある。

そして、グレープフルーツの最後の言及。何かが水の中に落ちる音が聞こえ、人々は、それがグレープフルーツを捨てた音であると確認する。グレープフルーツは、その魅力的な姿のまま“破棄”されたのである。

グレープフルーツは、それ自体姿を変えることはなく、誰にでも平等にその魅力をアピールしている。だが、それを受け取っている側のその時の状況、心理状態によって、その魅力はまさに正反対の要素になってしまう。Fairchild を中心とする“the older men”はグレープフルーツの魅力をその新鮮さだけに求め、Maurier 夫人やヨットパーティーなどに対する自分達の不満をぶつける。Maurier 夫人と Wiseman 夫人ら“the older women”は、なんとかグレープフルー

ツを受け入れようと努めている一方、“the younger people”は、Joshがガツガツとグレープフルーツを食べるなか、他の3人はグレープフルーツに対して無頓着である。人々は皆、自分達のこうした行動を認識してはいない。特に、“the older men”は、坐礁したヨットという狭い空間の中で、それも自分達の船室に閉じ籠り、勝手な“talk”に興じ、現実を凝視する力も気力も持たず、頭の中での世界に理由づけをしてしまう。閉ざされた空間のなかでグレープフルーツを排斥するというこの行為は、新鮮な時のみ注目するが、時間と窮屈な環境で、それを見る力が鈍り、嫌悪感に移行する。論をすすめれば、ヨットパーティーの始まった頃の、彼等の恋愛論の対照“the younger women”、JennyとPatriciaへの関心度の減少をも示すものと考えられないだろうか。

Patriciaは、その若さの魅力から、ヨットパーティーの中で象徴的な存在であった。象徴はすなわちそれを創り上げる人々によるものであるにもかかわらず、その人々の精神状態、客観的な視点の変化によって、現実的にはその象徴は消失してしまっているのである。無邪気にも自分の道を進んでいるかのように見え、実際は背後に常に存在する兄Joshをも自分の人生の中に引きづっていかなくてはならないPatricia。“女性”として独立して輝き生きる要素も持たず、物語が終りを迎えていることは、彼女が、グレープフルーツのように、その魅力的な姿を人々に誇示しながら、実はオレンジの特性のように、短期間にいたんで、色褪せ、人の目を楽しませることもできず、食べることもできなくなるように、やがて人々に飽きられ、捨てられる宿命にあることを象徴している。

V

Faulknerは、*Mosquitoes*について“not an important book in my list”¹²⁾と、自ら語っているが、これは様々な厳しい批判を受けたことによる自己評価の現れともいえるものであろう。

It's not a good novel, but it was an essential step in Faulkner's progress towards the great achievement of the late twenties and early thirties.¹³⁾

と言われるように、*Mosquitoes*は残念ながら、作品自体が非常に素晴らしいものであると評されることはまずなく、この作品の中に秘められた要素が、のちのFaulknerの中で花開くための、ある通過点として考えられているのである。“idea book”¹⁴⁾であるとされている*Mosquitoes*は、Faulknerのその後の創作活動に大きく影響を与えている。現に*Mosquitoes*を1926年の9月に書き上げたあと、彼はすぐに“Father Abraham”*The Hamlet*の準備にとりかかっている。

Nausikaa号という限られた空間とその特殊な状況の中で、“eternal beauty”に対して、人は様々な感情を抱き、それが状況に左右されていく。New Orleansとヨットと言うFaulknerの馴染みのない世界の中で、その閉鎖的的社会における人間の心情を描いたFaulknerは、象徴的な物に対する客観的な視点の変化のおもしろさを*Mosquitoes*の中で立証している。これは、

Yoknapatawpha Saga という特殊で、閉鎖的社會を舞台に繰り広げられる彼の世界に受け継がれ、影響を受けていると考えられる。

さらに、魅力的に登場しても、ついには発展的要素を持ち得なかった Patricia は、大成された Faulkner の世界とそこに生きる女性への試作として、Faulkner の創作活動の基礎造りに大きな影響を与えていると考えられる。それ以後の Faulkner の描く女性は、Patricia の innocent をもち、閉鎖的社會の中で成長しながらも、各々の可能性を大いに発揮する力を身に付けて、よりもっと力強く生きていく。兄 Quentin の想いや、自己愛にもかかわらず、墜落の道と知りながらも突き進む Caddy Compson。女、妻、母と女性の様々な役割を担うに従い、女性としても自立し、自己主張する女性となった Eula Varner。逆境にも屈せず、お腹の子の父親を探しに、いかなることにも屈せずただ己の道を明るく力強く進んでいく Lena Grove。彼女は捨て去られる美ではなく、次の世代に継承しながら力強く生き残る“美”として生きている。

Mosquitoes は、Maurier 夫人の催すヨットパーティーを舞台にし、登場人物の半数が女性であるにもかかわらず、中で交される議論、客観的視点は、すべて“男性”の基準に基づいて行われ、したがって Patricia の可能性の否定、グレイプフルーツの破棄もこうした中で行われている。作品を締めくくる Epilogue も、まさに、男性の偏見や自己主義的思い込みで埋め尽くされている。しかし、その最後で、Faulkner は、次作へのある可能性を示している。

女性に対する自分の態度の曖昧さにもどかしさを実感し、Fairchild にその手立てを聞いてもらおうと、“I will be cruel and hard, brutal,…” (p. 303.) と電話をかけて問い掛ける Talliaferro。

An interval filled with a remote buzzing. Then a female voice said:

‘You tell’ em, big boy: treat’ em rough. (p. 303.)

彼の電話は Fairchild には届かず、おそらく電話のオペレーターであろう女性がこう答える。この言葉には、高圧的で自信に満ちあふれ、いかなる言葉も軽く受け流す迫力がある。Patricia が作品の中でその可能性を否定された後、こうして作品のまさしく最後に、彼女とはまったく異なるカテゴリーに属す女性が登場し描かれることは、こうした力強く生き抜く女性が、グロテスクなまでの葛藤を、今後 Faulkner の造りあげる世界で繰り広げられることを予見させる。特に、Patricia とグレイプフルーツのアレゴリーとでも言える作品の最後での描写ゆえに、非常に刺激的に、そして印象的に感じられる。*Mosquitoes* のまさしくこの最後の言葉は、Faulkner の小説家としてのさらなる脱皮を意味し、Yoknapatawpha Saga への礎として、*Mosquitoes* が不可欠な小説であることを示すものである。

註

- 1) Cleanth Brooks, *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1978), p. 129.

- 2) Edmond L. Volpe, *A Reader's Guide to William Faulkner* (New York: Straus and Giroux, 1964), p. 56.
- 3) Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (London: The University of Georgia Press, 1966), p. 68.
- 4) Joseph Blotner (ed.), *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Vintage books, 1978), p. 34.
- 5) Cleanth Brooks, *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*, p. 133.
- 6) Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner*, p. 70.
- 7) Cleanth Brooks, *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*, p. 136.
- 8) *Ibid.*, p. 135.
- 9) Joseph Blotner, "William Faulkner: Life and Art," in *Faulkner and Women: Faulkner and Yoknapatawpha*, D. Fowler and Ann J. Abadie (eds.) (Jackson: University Press of Mississippi, 1986), p. 11.
- 10) William Faulkner, *Mosquitoes* (Picador Classics, 1989), p. 12.
この作品からの引用及び作品への言及は全てこの版に基づくものとし、以後、引用箇所には、括弧内に頁数を示す。
- 11) Albert J. Guerard, "Faulkner's Misogyny," in *William Faulkner*, Harold Bloom (ed.), (New York: Chelsea House Publishers, 1986.), p. 146.
- 12) Frederick L. Gwynn and J. L. Blother (eds.), *Faulkner in the University* (Charlottesville: The University of Virginia Press, 1959), p. 257.
- 13) M. Millgate, *The Achievement of William Faulkner*, p. 75.
- 14) *Ibid.*, p. 73.